『藤原定家』笠間書院コレクション日本歌人撰011

村尾誠一著

笠間書院　二〇一一年三月

村尾誠一先生の『新古今和歌集』講義を聴講した留学生の一人からこういう話を伺った。「村尾先生による和歌の解読を聞くことは本当に楽しいことです。精神的な欲求が満たされてとっても癒されます」と。そう言われてみれば、私にも同様な体験があった。かれこれ十数年も前のことになるのだが、私が受講した先生の中世日本文学に関する一連の授業は、今でも鮮明に深い印象として残っている。『新古今』はもちろんのこと、『徒然草』『方丈記』と、韻文散文に関わらず、その面白く深みのある解読は、その後教師となって日本文学を教える立場となった私の講義にも生きているのである。

思うに、例え文化・文学的に影響と被影響の関係を確認でき、日本古典文学との共通性を多かれ少なかれ持つ、同じ東アジア漢字文化圏に生きる中国人にとっても、日本文学を学ぶ際にもっとも難解と感じるのは和歌ではなかろうか。その中でも特に近づき難いのは、藤原定家が撰者の一人として編纂した、いわゆる八代集の最後を飾る『新古今和歌集』であろう。素朴な『万葉集』と、それから漢詩漢文を宮廷文学とした国風暗黒時代を経て成立した『古今和歌集』に比べ、その三百年後に編纂された『新古今』からは、言語としてその高度な成熟度によって作り上げられた耽美的な文学的空間を薄々と感じ取ることはできるのだが、あまりにも象徴的で繊細な感性とその華やかな技巧とに惑わされ、歌の意を適切に捉えることがやはり困難である。このことは日本がもっとも独特な文学世界を作り上げることができたということをも意味するのであろうが。

この『新古今和歌集』の、いわゆる新古今調を作り上げたのは、言うまでもなく藤原定家の父、歌学者かつ歌人として当代の歌の世界の大家であった藤原俊成である。そして、父俊成によって提起された「幽玄」と「有心」を継承しながら、体言止めなどの巧妙な技法を駆使し、「余情」を響かせる妖艶で哀愁感の漂う歌体を築き上げたのが、藤原定家である。その詠嘆的な調べは、鎌倉武士政権の確立による王朝貴族社会の凋落の挽歌として中世の夕暮れの空に響き渡る。従って、定家の歌を読み解くことが新古今調を把握するために必須であることは、間違いないのである。

一方、その新古今調は、あたかも爛熟した晩唐の、李商隠、温庭筠による妖艶かつ耽美で朦朧とした詩風を彷彿とさせるところも確かに存在するのだが、ところで、いざ正確に読み解こうとすると、事情が違ってくる。長らく和歌文学の伝統に沈潜し、『新古今』に至るまでの和歌文学の知識を丹念に習得しなければ、いきなりの解読はとても不可能である。日本古典文学を研究する外国人の研究者にはなおさらそうであろう。

だが、村尾誠一先生がお書きになられた『藤原定家』は、この近寄り難い定家という常識をくつがえす。定家の歌五十首を取りあげ、一首に付き、見開き二ページを当て、右から「作品本文」「出典」「現代語訳」「観賞」と続き、さらに「脚注」が

付く。また、著書の終わりには定家の「略歴」「略年譜」に続き、著者の村尾先生による「解説・藤原定家の文学」「読書案内」、さらに唐木順三による「古京はすでにあれて新都はいまだならず」という定家論のエッセイも収める。凝った工夫の丁寧な定家鑑賞の一冊となっている。

本著の「解説」にも述べられているように、定家の歌は、当時でも「新儀非拠達磨歌」というレッテルを貼られ、伝統から逸脱した難解さのために非難されている。だが、さすがに長年中世文学、特に定家研究に力を込めて研究成果を築き上げられてきた著者ならではの仕事だ。現代語訳もそうだが、解読観賞文のわかり易さからみれば、著者の長期に渡る現場教育でのご経験も活かされているように思われる。初心者にとって非常に有りがたい平易な内容に止まらず、より深く読むための作歌の背景説明と先行研究への指示もたっぷりと用意されている。実に見事というのが、この本を拝読したあとの私の率直な感想である。

例として定家の名歌、『新古今和歌集』に載る、かの「三夕の歌」として知られる「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」についての評釈の一部を挙げよう。出典は『新古今和歌集』で、『源氏物語』の明石巻との関連などを確認したうえで、「この歌の場合、さらに中世的な美意識を代表する歌としても捉えることが多い。すなわち、華麗な物を一切そぎ落とした世界の美しさであり、侘茶などにもつながる世界とされる。茶道の古典である『南方録』にも、この歌は茶の湯の美意識を代表するものとして引かれている」と一般論を紹介しながら、この歌の世界は「全く最初から何も華やかな物のない風景を考えるのではなく、一度読まれた花や紅葉の華麗な印象は打ち消されながらも残るという、残像効果を前提とした美の複雑なあり方を考えるのが普通である」と研究史を踏まえながら読者を深読みへとみちびく。そして、「それをいち早く表現し得た作品がこれであり、若い天才の手柄として考えるのである」と定家を高く評価する。確かに、この歌を作った当時の定家の若干二十五歳という若さを考えれば、凄い天才としか言いようがない。

また、例えば「夕暮はいづれの雲のなごりとて花橘に風のふくらん」と『新古今』「夏歌」に載る定家のこの一首について、橘の香は昔の人を思い起こさせる『古今集』以来の恋歌の伝統であると説明し、夕べの雲は漢籍である『文選』の「高唐賦」に出てくる、雲に化身し巫山で王と一夜を共にした美女のイメージとも重なると解説。さらに、「雲のなごり」という歌語に焦点を当て、「故人のなごりとしての、火葬の煙の果てを想像する」として、『源氏物語』「夕顔巻」の「見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつましきかな」を、殆どその本歌と見なし脚注に参考歌として挙げる。その上に、本歌取りなどの技法を駆使した定家の創作方法論について、「古歌を自分の作品に引用し、その引用された作品の上に立ちながら、自らの作品世界を展開させて行く」（「解説」）という定家の「古典主義」を紹介されている。

定家の「古典主義」について付言すれば、本著は「解説」において、中世において和歌に迫られた改革という問題に関して和歌史的な説明を行っている。万葉集にさかのぼる蓄積と、あまりにも多くの作品が読まれてきたために定型がすでに出来

上がってしまっていた和歌が新たな秀歌を生む環境的な難しさを指摘した上で、その環境に置かれた当時の歌人の困惑と、幕府の政治的な優位の確立とともに不安定へと余儀なくされた貴族生活の中で、定家は再出発を図るために「寛平以往」の六歌仙時代の「破格な面」「野性味」に新生の力を求めたと解説されている。著書の最後に付録として載せられている唐木順三のエッセイにおいて、定家の歌風の確立はさらに「現実生活との断絶の上に始めて成立する」という論が紹介される。

私としては、本著を拝読し、触発されたことは、やはり定家の決め手と言える本歌取りという技法である。本歌取りの試行は、確かに古今集以来のことであるが、漢詩の「典故」技法と異曲同工の趣があるように思われる。この技法は、古きと新しきとのイメージの重なり合いにより、限られた短い詩歌の世界を膨らませ、より内容の豊かな感情の表出に貢献したのみならず、失われた古き良き昔へと戻る「懐古」の装置でもあったのであり、そこに王朝貴族社会への望郷の念を読むこともできるであろう。

（黄少光）